

仲宗根政善先生をしのぶ

| | |
|-----|---|
| 著者 | 高橋 俊三 |
| 出版者 | 法政大学沖縄文化研究所 |
| 雑誌名 | 沖縄文化研究 |
| 巻 | 22 |
| ページ | 104-114 |
| 発行年 | 1996-02-01 |
| URL | http://hdl.handle.net/10114/1026 |

仲宗根政善先生をしのぶ

高橋 俊 三

仲宗根政善先生のような偉大な人の業績を述べることは、私のようなものがよくするところではない。先生の思い出を書いて、先生の感化でどのように私が成長したか再確認したい。多くの人々のこのような報告の集積とその分析を通して、初めて先生の偉大さが全体象を見せるのだと考える。

出会い

仲宗根政善先生に、私が最初にお会いしたのは、広島大学大学院の在学中に、先生のもとで、研究生をしていた生塩陸子氏が、先生のお宅に連れて行ってくれた時である。沖縄の夏の暑いさなかに、訪問したのであるが、鳳凰木に覆われた、赤瓦の木造のお宅が、涼しかった。玄関に入ったすぐ右側が先生の書斎であった。いかにも隠れた研究者という印象であった。

私はこれ以前に先生にお会いしようとして、果たせなかったことがあった。一九六三年、私が広島大学の学部三年生のとき、与那国の方言の調査に行く途中、先生に助言を仰ぐと先生の東京帝大で

同期の岩佐正先生の名刺を持って、琉球大学を訪問した。しかし、先生はハワイ東西文化センターに研修中で、お会いできなかった。事務のお方の紹介で、新里幸昭さんに会った。いろいろ話を聞いて、琉球方言研究クラブのレベルの高さと、私の準備不足・力不足がよく分かった。

*

*

思えば、それも当然である。その半年前までは、将来は教員になろうと思っていたし、卒業論文は「夏目漱石における西洋と東洋思想の葛藤」といったものを書こうとしていたのだから。私の通った中学校・高等学校は、もと藩校であった、男子ばかりの受験予備校のような学校であった。押さえつけられた雰囲気はつらかった。一九六〇年の安保闘争は、高校三年生の時であった。テレビや兄たちの話でその様子を知ったのであるが、その挫折は間接的ではあるが、感じられた。高度経済成長のさなかで、経済的には豊かになっているのであるが、精神的な面は粗末にするようになっていた。地方の呉服商の三男の子である私にもひしひしと感じられた。そういったことから、近代とは何かを明らかにすべきだ。それが自分の鬱屈した気持ちを開放してくれるであろうと思えた。その要の部分に夏目漱石がいるように思われて、上記のような課題を考えていた。広島大学に入学して、機械文明に反発し、野山を歩き、自然に接しようというワンダーフォーゲル部に入った。あちこち歩いている間に、大きな山脈や河を越えると、風俗・言語が変わることに興味を抱くようになっていた。しかし、なにかの時、ふと不安になり、心は晴れなかった。

大学二年から三年になる春の休暇に、両親は沖縄の出身であるが、本人は本土で生まれた、ワンダーフォーゲルの先輩が沖縄と一緒にいこうと誘ってくれた。渡航のための身分証明書が、私一人にしか発給されなかったので、私一人が沖縄に行くことになった。与那覇岳に登り、宮古の東平安名崎。狩俣を見、石垣の於茂登岳に登り、与那国に渡った。その間、多くの人に接した。その人々は、物質的には恵まれていないのに人間的には豊かであった。私の鬱屈とした心は慰められた。ずっと求めているのはこれだと思った。そのようなことから、広島に帰ると、またすぐ沖縄に行きたくなった。沖縄に行く方便として、与那国方言調査を思い立った。そのほか多くのことがからみあっているが、それが正直な所、主な理由であった。そのような私の方言研究の知識は、たかが知れていた。しかし、ともかく卒業論文「沖縄八重郡与那国町比川方言の研究―文表現法を中心にして―」を書いた。

*

*

先生に二度目にお会いしたのは、一九六七年の国語学会に出席のため広島に来られたときのことである。若い学徒と宿をいっしょにしていっちゃったことが印象的であった。

一九六七年一月、私は修士論文「沖縄八重郡与那国町比川方言の研究―語彙論を中心にして―」を書き終えたあと、広島で沖縄研究をするもどかしさと自分の能力のなさに、極度に落ち込んでいた。仲宗根政善先生のもとで勉強したく思って、研究生になりたい旨の手紙をさしあげたら、引き受けるという返事があった。ふっくらした丁寧な字で、書かれていた。うれしかった。生き返れるといった

気持ちになった。

研究生時代

一九六七年四月、沖縄に来て最初に、先生のお宅に挨拶にいった時に、「沖縄の言葉にだけでなく、心にも目をそそいで、沖縄好きになって下さい。」とおっしゃたのが印象に残っている。その後の一年は私の遅い疾風怒涛時代であった。思い出が多い。

沖縄に来て一月もならない内に、仲程昌徳・喜友名朝宏・比嘉実君などと飲んだあと、先生のお宅に行った。もう、お宅の電灯は消されていたのだが、お起きになって、私どもの青春のくだらない話を聞いて下さった。嘉味田宗栄先生が仲程君に、下宿で静かに飲みなさいと与えられた泡盛を、仲間が集まって、一晩で飲み干してしまった。岡本恵徳先生・池宮正治先生と学生桜坂の「八重」で飲み歌った。琉球方言研究クラブの人と、久高調査、国頭調査に行った。同じ研究生の本村勝史さんと宮古調査をした。多良間島の八月踊りも見た。（渡航拒否反対闘争で有名な、仲宗根先生の東京帝大時代の友人の永積安明先生のために、季節外れに八月踊りをした話も聞いた。）国文科四年次の人々と与那の演習林で合宿をした。先生の仲介で仲程君と「守礼の門」に琉球方言研究クラブの紹介文を書いた。（後に、玉城政美君にアメリカの宣伝に荷担したのだと叱られた。）国文科のソフトボール大会で国文科の先生方が全員参加され、仲宗根先生はピッチャーもされた。当時先生は六一歳だったの

だ。

研究生論文は「南島方言の方言地理学的研究―沖縄・宮古諸島のばあい―」というものであった。九一項目を八八地点で調べ、地図化するのが精いっぱい、論述はそれほどできずに終わっている。北部では連体形の末尾がルではなく、ヌであることに気付いて、先生に「このヌはルが音韻変化したのでしょうか」尋ねると、「与那嶺方言などではヌとルが両方あり、使い分けられているので、簡単にそうとは言えない。私はずっと以前から考えているのだが、未だ結論が出ない」とおっしゃった。先生の慎重さに頭が下がった。

一九六八年二月に研究生を終えるにあたり、先生に御礼の挨拶にうかがった折、「一年では、十分沖縄（の言葉）を感じとるには、短かったのではないですか。もっといたいのなら、国際大学が教員を探しているようなので、紹介してあげよう。」とおっしゃった。沖縄の魅力に取り付かれていた私は、すぐをお願いをした。先生の御口添えで、私はコザ市にあった国際大学に就職することになった。先生は、その年の四月から一年間東京大学に研修で行かれた。私はその間、先生の担当していらった国文法の授業を非常勤で受け持った。今思うと汗顔のいたりである。

戦時中。ひめゆりの塔のことなど

研究生をしていた一〇月、お宅を伺った時に、著者『沖縄の悲劇』（華頂書房発行、一九五一年八

月五日の再版本）を下さった。嬉しかった。一気かせいに読んだ。映画や話で聞いていたひめゆり学徒の様子が私の脳裏に焼き付いた。

いつのことであつたか、先生は国立国語研究所の『日本言語地図』のための調査に、久高島に行くのに、私を誘って下さった。夕方、宿で「潮騒が聞こえて来るでしょう。あれを聞くと、摩文仁の海岸を彷徨したことをよく思い出す」としみじみとおっしゃったのが、印象的であつた。思えば、先生の書き物の中に「潮騒」という語がよく出て来るように思う。

ある日の夕方城西小学校の裏手に大木があつて、その幹を触りながら、「この多くの穴は弾丸の跡です」とぼつりとおっしゃった。

一九七一年頃、ひめゆり霊園の木はモクマオウであつた。先生はそれをデイゴにしたいということ、何名かを連れて、植えに行かれた。私はその残りを家に持って帰って、思い出に植えようとしたところ、妻はデイゴはサーダカキ（霊力の高い木）なので個人の敷地に植えては行けないと反対した。そこで、国際大学の校庭に植えたのであるが、球陽高校ができた今は、切られたことであろう。また、何年かして、鳳凰木を植えに行った。先生はいつも霊園のことを考えていらつしやう。

オモロ研究会

一九六九年四月、先生は東大での研修から帰られ、その前年から池宮正治先生を中心に行なってい

た「オモロ研究会」に入られるとともに、自宅を研究会の会場に提供して下さった。その数ヶ月後、私も入会させて頂いた。毎週金曜日午後六時半頃から一〇時半頃まで、自由な雰囲気の中で勉強した。（オモロ研究会の歴史およびその成果などは、すでに報告されているので省略する。まだ触れられることのなかった地名研究のことを補っておく。）先生は「オモロ、特にその地名の研究は現場に行つてから考えなければならぬ」と常々おっしゃっていた。浦添城。当山の宿道。セーファ御嶽。イシヤラトーグスク。山城などに出かけて行ったりした。その時のことどもがきっかけになって、当時オモロ研究会が『青い海』に連載していたので、それに「さやはの春秋」（一九七七年五月）、「いしやらたうぐすく」（一九七八年一月）、「なかべきよら城」（一九七九年七月）を書かれた。

奥様（及び御家族の皆様）は茶菓のもてなしで大変だったと思う。研究会だけでなく、誰その歓迎会だ、送別会だ、祝賀会だ、忘年会だといってお騒がせした。特に元旦は、昼から夜遅くまで大勢の者（教え子だけでなく、その妻や子供まで）が集まった。奥様はいつもニコニコと迎えて下さった。思えば、奥様が倒れたのも一九九二年一月であった。正月の疲れが原因であったのではないかと恐れる。

一九七一年私と恵子のクファンムイ（結納）の時は、仲宗根先生は私の親代りとして、奥様ともども、恵子の家に挨拶に行つて下さった。末吉武光さんは友人代表で参加した。彼はその時の先生の挨拶の様子を、時々話題にしていた。先生も印象に残っていらっしやたのか、入院していらっしやる時、

この話をするとう懐かしそうにお笑いになった。

琉球大学退職と沖縄国際大学での非常勤

一九七五年四月に、先生は琉球大学を定年退職された。そこで私は先生に、沖縄の子弟のために沖縄国際大学で講義をしてくださるようお願いした。仲程昌徳さんや名嘉順一さんたちが、「お宅にずっと籠って勉強されるのは、健康のためによくない」と、勧めたので、非常勤で沖縄国際大学に一週間に一度来て下さることになった。琉球大学の学生と接すると全く同様に接しておられた。「復帰前の琉大に似ている」とか「素直な学生たちだ」とか、おっしゃっていた。年度初めの授業では、受講学生の出身地、両親の出身地を書いて出させるのと、いっしょに写真を撮られるのが常であったらしい。その時の学生に現在読谷村史編集室に勤めている泉川良彦君がいる。彼は一九七九年七月に『増補版』おもろさうし研究索引』を作成した（初版は桃原茂夫氏が作成した）。

先生は、退職される頃から論文を多く発表されるようになったと思う。一九七五年三月「与那嶺方言の撥音『ン』と促音『ツ』」（『琉球大学文学・哲学論集』）を、一〇月に『今帰仁村史』の言語の章を、一九七六年二月に「おもろ語の『くもこ』について」（『新沖縄文学』31号）と、「宮古および沖縄本島方言の敬語法―『いらっしやる』を中心として―」（九学会連合沖縄調査委員会編）とを、続いて四月に「おもろの尊敬動詞『おわる』について」（『沖縄学の黎明』伊波普猷生誕百年記念会

編、沖縄文化協会発行）を発表なさった。その視野の広さ、透徹さ、実証性、文章のみずみずしさに私はひどく感動した。

なお、一九八二年（先生七六歳、琉大退職後七年）に先生の古稀記念論文集『琉球の言語と文化』を教え子たちが献呈したのであるが、この頃が教え子たちがそろって一人前になって、満開といった時期であったと思う。私はそれに、先生がっねづねまとめるように言われていた『おもろさうし』における「口蓋化」を書いた。また、後に先生の「おもろの尊敬動詞『おわる』について」の動詞の整理の仕方を見習って、後に『おもろさうし』における動詞の活用（一〜六）を書いた。

（オモロ地名研究会）

一九七七年一月から仲松弥秀先生・平敷令治先生・名嘉順一さん・玉城政美さんと私で、行ったウミ研究会が、一九七九年二月に終了して、次に何をしようかと話していたところ、仲宗根先生の授業が終わったあと、オモロ地名研究会をしようということになった。メンバーは、仲宗根先生、仲松弥秀先生、名嘉順一さん、泉川良彦君に私であった。仲松弥秀先生も名嘉順一さんも沖縄国際大学に非常勤で来ておられた。泉川良彦君は南島文化研究所に非常勤で来ていた。

研究会が始まって、その様子をテープに録音することにした。そのテープは一九八〇年五月二〇日から、一九八三年五月一九日までの六八回の会合までが、残っている。

途中で、仲松弥秀先生の提案で、角川書店が企画している日本地名辞典の『おもろさうし』関係の地名執筆を引き受けることになった。『おもろさうし』に出て来る地名をカードにとり、それに基づいて討論するようになった。先生は『今帰仁方言辞典』の仕上げで忙しくなられたので、一九八二年三月に、七年間に及んだ沖縄国際大学の非常勤を辞められた。先生は沖縄北部を泉川良彦君に、沖縄中部を私に、沖縄南部の東側を嘉手苺千鶴子さんに、沖縄南部の西側を安里秀正さんに、久米島・慶良間諸島・先島を西表宏君に執筆させるように推薦なさった。その後も研究会は行なわれ、会独自で、あるいは、オモロ研究会と共催で、平安名のユサンディガー・多多名グスク・座善味グスク・山田城などを巡検した。研究会でカードに記録したことどもは、一九八六年出版の『角川日本地名大辞典』に反映されている。

なお、先生はこの辞書では、十分記述するスペースがないことから、別に「オモロの地名」について単行本を出すように、朝比奈時子さんを通じて、角川書店に働きかけられ、角川書店も同意した。私どもは何度も会議をもち、取り上げる地名を決定したり、嘉手苺千鶴子さんがその見本原稿を書いたりしていたのであるが、西表宏君が香蘭女子短大に赴任したり、会員が忙しくなったりして、それは自然に音沙汰なしになってしまった。先生の教育的配慮に込めることが出来ずに、残念に思っている。

*

*

以上のように、「先生から私の受けた感化はどのようなものであったか」といった程度のもではない。今日の私があるのは、ひとえに先生のおかげである。ただただ合掌する以外に感謝の表わしうを知らない。合掌。